

## 京都府における郷土教育の展開とその背景

井岡康時

本研究ノートの課題は、明治期から昭和戦前期の京都府における郷土教育の展開過程を明らかにすることである。郷土教育は、児童・生徒が生育してきた地域の地理・歴史・自然環境などについて学ぶことを通じて郷土愛を陶冶することを目的としていた。とくに一九三〇年代には、郷土愛を愛国心につなげようと政府が積極的に推進したため、全国の主として小学校で多様な実践が試みられた。一九三〇年代の郷土教育についてはすでに多くの研究があるが、これを近代の地域史のなかに位置づけた研究は少ない。近代以降の地域においては、おそらくナショナリズム隆盛の影響を受けたためであろうが、歴史遺跡や遺物、あるいは伝承などへの関心が高まり、記念碑や風土記、図会などの刊行が進められ地域史研究が前進した。郷土教育がこうした動向と無関係に展開したとは思えない。そこで、本研究ノートにおいては、近代以降の京都府で進展した地域史研究との関連に留意しつつ、郷土教育の歩みを説明することをめざした。地域史研究は必ずしも大学に所属する研究者だけではなく、各地の郷土史家、歴史愛好者と呼ばれる人びとによって進められてきた。こうした地域に根ざした研究者と郷土教育の担い手である教員との関係についても言及した。

はじめに

本ノートでは、明治期から昭和戦前期にかけて京都府において進められた郷土教育の展開過程について基礎的事実を整理することを主たる課題とし、あわせて並行して進展した地域の史料・史蹟・地誌などに関する調査・研究との関連について考察していく。同志社大学人文科学研究所の第二〇期第九研究においては、「歴史学の成り立ちをめぐる基礎的研究―現場と公共性―」（代表小林丈広）を主題に、「歴史学と地域社会との関係に焦点を当て、その歴史的展開をさまざまな角度から検討する<sup>〔1〕</sup>」ことをめざして検討を重ねてきたが、かかる研究テーマのなかに、地域の地理や歴史を探究しようとした教員や、その内容を教室で実践しようとした郷土教育という営みは、どのように位置づけられるだろうか。本ノートは、こうした問いについて

て考察を深めるための覚書として作成する。

明治期から昭和戦前期の郷土教育は、初等・中等教育において進められ、その内容とねらいは、児童・生徒が生育してきた地域の地理・歴史・自然環境などについて学ぶことを通じて、郷土愛を陶冶しようとするものであった。とくに一九三〇年代には、政府が昭和恐慌による地域経済の危機克服と総力戦体制の構築に向けた施策を展開するなかで、郷土愛を愛国心につなげようとの意図から郷土教育を積極的に推進したこともあって、全国の小学校でさまざまな実践が試みられた。

学校教育において郷土を学ぶという実践はけっして過去のものではない。二〇〇六年の教育基本法の改正では、「教育の目標」を定めた第二条に「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」という一項が入られた。また、現行の小学校学習指導要領（二〇一七年三月告示）をみると、社会科の「目標」として、「地域や我が国の国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解する」ことがあげられている。学習指導要領では郷土という言葉は用いられていないものの、「地域」の地理、歴史、伝統、文化などを学ぶことが求められているのである。こうした現状を批判的にと

らえ、「歴史学と地域社会との関係」にかかわる認識を深めるためにも、明治期から昭和戦前期の郷土教育を地域社会と地域史研究のなかに位置づけて考察してみることに少なからぬ意義があると考える。

前述のように一九三〇年代に郷土教育は一つのピークをなすが、この時期については、すでに伊藤純郎『郷土教育運動の研究』（思文閣出版、一九九八年、増補版二〇〇八年）、外池智『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究―『綜合郷土研究』編纂の師範学校を事例として―』（NSK出版、二〇〇四年）、板橋孝幸『近代日本郷土教育実践史研究―農村小学校教員による地域社会づくり構想の展開―』（風間書房、二〇二〇年）といった浩瀚な著述があり、その大要は明らかになっているといつてよい。

これらの研究は、書名中の「運動」や「実践」という表現に示されているように、教育活動の主体となった主として小学校教員の動向や思念に焦点を当てて分析するとともに、教員を統制した当時の文教政策と、地域の状況に即した教育内容を生み出そうとする教員との間に生じる相克も内包しながら展開した状況を明らかにしようとするものであった。しかしながら、こうした研究は当該地域の歴史的・社会的特性、ならびにそうした特性を背景に産出された地域史研究など知的営為との関連に

は必ずしも注意が払われていない。

具体的には以下のようなことである。たとえば、早くに羽賀祥二は、一九世紀から二〇世紀初頭にかけて歴史的遺蹟や遺物への関心が高まったことに注目し、当該期の「文明意識」や「ナショナルな社会意識」を明らかにすることをめざして、各地で立てられた記念碑や風土記・図会などの解明を進めた。<sup>(2)</sup> これを受けて近代日本の歴史意識の研究や、記録と記憶に関する比較史的研究が進展している。<sup>(3)</sup> 一方、郷土をキーワードとした、近代の地域史研究に関する史学史的な考察や、祭祀行事や民俗芸能の発見、再生などの動きについての研究も進められてきた。<sup>(4)</sup> おそらくは近代のナショナルリズムの隆盛の影響のもとに生じてきたであろう、こうした地域の動向と無関係なままに郷土教育が進められたとは思えないのだが、従来の研究はかかる問題群への注意が十分ではないように感じられ、そうした欠落をかかえたままでは、第二次大戦後の社会科学教育につながる郷土教育の歴史的意義を把握することは困難であろうと考える。

以上の問題意識をふまえて、本ノートでは、次の二点を主たる課題として論を進めることとする。第一点は、京都府における郷土教育の展開過程を明らかにすることである。前述の伊藤純郎らをはじめとする今日までの研究は、各地域の状況をかなり広汎に明らかにしているものの京都府についてはほとんど触

れておらず、これまでも管見の限りでは京都府に焦点をしばった専論は見当たらない。その理由としては、従来の研究においては、一九三〇年一月に刀江書院社長尾高豊作や地理学者小田内通敏らが中心となって結成した、民間の教育団体である郷土教育連盟が重要な分析対象となってきたが、この組織に京都府の初等・中等教育機関がほとんどかわりをもたなかったためではないかと思われる。今ここで、郷土教育連盟不参加の理由を詳らかにすることはできないが、<sup>(5)</sup> 後述するように明治期から郷土教育を追求してきた京都府の状況を明らかにしておくことは、今後の研究に益する点が少なからずあると考える。

第二点は、冒頭に述べたように、京都府における地域史研究の生成・発展と郷土教育との関連を探ることである。前者については、すでに小林丈広編著『京都における歴史学の誕生―日本史研究の創造者たち―』（ミネルヴァ書房、二〇一四年、以下『歴史学の誕生』と略記）がある。本ノートにおいても、その成果を多用することになるが、同書は編著者の小林が「序章」で述べているように、京都という「現場からの史学史を目指して」編まれたものである。地域史研究を担ってきた多様な人びとのなかに郷土教育の担い手たちを数え入れ、地域の史学史のなかに位置づけてみることは、「現場からの史学史」をより豊穡なものに改めていくことにつながるのではないかと考え

る。

以上の二点を念頭に置いて、明治期から昭和戦前期までの推移を時の順にしたがつて述べていきたい。なお用いた史料は京都教育大学付属図書館、京都大学付属図書館、京都府立・京都市歴史彩館、京都市学校歴史博物館で閲覧しており、それぞれ「京教図」、「京大図」、「歴史彩館」、「学歴博」と略して所蔵を示した。京都府教育会の機関誌『京都府教育雑誌』（一九〇二年刊一二七号より『京都府教育雑誌』、一二年刊一二七号より『京都教育』と改題）を多用しているが、一点のみが「京大図」、他は「歴史彩館」である。煩を避けるため所蔵機関の記載は「京大図」の一点だけとした。

## 一 近代教育の発足・展開と郷土教育

### 1 京都市中における郷土教育の始動

地域共同体が姿を整え、その始原にかかわる伝承や物語が形をなすようになると、若年者への歴史の継承が課題となってくる。郷土教育の淵源は、このような共同体の形成期にまでさかのぼるはずであり、その歴史を語ろうとするなら、少なくとも伝承や物語を図画や言葉とともに紙上に定着させた近世の名所図会や風土記・地誌、往来物などから論を展開すべきである

う。しかしながら本ノートでは手に余る課題であり、時期を明治期以降に限定して論を進めていく。

前掲外池智『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究』は、一八八一年五月四日付公布の「小学校教則綱領」第一四条が、郷土教育にかかわる文部省の規定としては最初のものであったとする。そこには「地理ハ中等科ニ至ツテコレヲ課シ、先学校近傍ノ地形即チ生徒ノ親シク目撃シ得ル所ノ山谷河海ヨリ説キ起シ、漸ク地球ノ有様ヲ想像セシメ」とあり、続いて「地文ヲ授クルニハ務テ実地ニ就キ児童ノ観察力ヲ養成スヘシ」と記されていた。児童が地理を理解するためには、「親シク目撃」することのできる「学校近傍ノ地形」をもとに説明することが適切であり、「地文」つまり大地のありさまを教授するには、「実地」に対する「児童ノ観察力」を養うことが肝要であるといった趣旨である。まだ郷土の語も用いられておらず、地理学習を容易に進める手法として児童の生活圏の活用が推奨されているだけで、その教育内容に対して、後年のように愛国心に結びつけるといった意味付与はなされていないことに注意しておきたい。

京都では、この翌年一八八二年五月に松野新九郎、安原時太郎校定、遠藤茂平纂輯になる『小学山城地誌』（出版人村上勘兵衛（学歴博）が刊行された。内容は、山城国内の京都およ

び各郡の山・川・地名・史蹟など地誌を紹介するもので、冒頭に置かれた「例言」には次のように記されていた（傍線は引用者。以下同）。

此篇ハ専ラ初学児童ノ読本ニ供フルモノナレハ、山川地名沿革名蹟等ノ如キハ固ヨリ概略ヲ挙クルニ過キス

編纂の目的を「初学児童ノ読本」のためと記している。書名にも「小学」とあるように、主たる読者を小学校児童と想定していたと考えられる。今のところ、この書を旧山城国域内の小学校の授業に用いたようすはみられず、前年の「小学校教則綱領」第一四条に即して作成されたものとは考えにくい。「纂輯」者として姓名が記されている遠藤茂平は前年刊行の『京都名所案内図会』と題した図書の「編輯」者にもなっているので、京都の地誌本を得意とするライターの商品とみることができ、さしあたり学校教育との関係は薄いとみてよいだろう。しかしながら、明治期の比較的早い段階で「初学児童ノ読本」向けの地誌が登場したことには留意しておきたい。

さらに前掲外池の研究によると、文部省は一八八一年の「小学校教則綱領」に続き、九一年一月一七日付文部省令により「小学校教則大綱」を発表、はじめて郷土の語を用いて、具体

的に教育内容を規定した。たとえば地理学習においては、「尋常小学校ノ教科ニ日本地理ヲ加フルトキハ郷土ノ地形方位等児童ノ日常目撃セル事物ニ就キテ端緒ヲ開キ」（第六条）、歴史学習においては、「尋常小学校ノ教材ニ日本歴史ヲ加フルトキハ郷土ニ関スル史談ヨリ始メ」（第七条）、理科学習においては、「最初ハ主トシテ学校所在ノ地方ニ於ケル植物動物鉱物及自然ノ対象ニ就キテ児童ノ目撃シ得ル事実ヲ授ケ」（第八条）と述べ、児童の身近にある事物を教材として学習の契機とするよう求めた。こうして郷土教育は小学校教育のなかに公的に位置づけられたのだが、この段階においても直接愛国心には結びつけられておらず、各教科の理解を容易ならしめる手法の一つとして考えられていたのである。

それから五年後、一八九六年五月二〇日に山本顕造編纂『京都誌要』（清水正文堂 学歴博）が刊行された。京都市内の山・川・地名・史蹟などを詳しく紹介し、さらに旧山城国内各郡の地誌を簡略に述べたものである。「凡例」には、「此の書は京都市高等小学校第一学年の郷土地理歴史の教授用に編纂したるものなり」と記しており、京都市内高等小学校の地理・歴史の授業に用いることを明記している。これを初版として九九年四月には第三版が出されており、その「凡例」には、「此の書、三十年四月第二版を出版し、今またこれを修正して分量を減

し、語句の難きは之れをけづりて平易にし図画をも加へたり」とある。第二版は未見であるが、九六年五月に初版、九七年四月に第二版、九九年四月に第三版と改訂を加えながら版を重ねていたことがわかる。この書の各高等小学校での使用状況などは不明であるものの、教育の現場から一定の支持を得て、組織的・計画的に用いられていたからこそ重版が可能となったと考えてよいのではないだろうか。

以上のような高等小学校の「郷土地理歴史の教授用」の書籍が、この時期に作成されたのはなぜだろうか。とりあえず前述の一八九一年「小学校教則大綱」を受けたものと推定してよいと思われる。しかしながら京都市の場合、文部省の施策とは別の要素もあわせて考える必要がある。それは『京都誌要』刊行の前年、九五年一〇月に『平安通志』が刊行されたことである。この書の詳細については前掲『歴史学の誕生』所収の小林文広の論文を参照していただきたいが、同年に予定されていた平安遷都の一〇〇〇年記念祭に合わせて企画されたもので、京都府職員の湯本文彦らが中心となって編纂作業が進められた。小林論文はこの書を「日本で最初の自治体史」と評価し、「前近代の歴史書の体例の一つである紀伝体」によって叙述されているものの、第三編「歴史紀事」は「平安遷都後の嵯峨天皇の治世から一八九〇年の琵琶湖疏水完成に至るまでの京都の通

史」となっていると述べ、『平安通志』の構成に「前近代の歴史書」を超えようとする新味があったことを指摘している。

一方、高等小学校向けの『京都誌要』は京都の地誌を述べているのだが、「凡例」の末に「最後に附けたる歴史年表には、百年毎の紀元と此の書にあらはれたる人物、年号等を記入して、時代の前後及其間の年数の大略を知らん為の便に供せり」として、巻末に本の判型よりは大きな年表を折り込んでつけている。編者は地誌的な内容を学ばせるとともに、そうして得られた知識を歴史の時間軸のなかに位置づけて理解させようとしたのであろう。編纂者の山本顕造については、奥付から愛宕郡上賀茂村の住民ということしか分からず、『平安通志』とのつながりは不明であるが、『京都誌要』の編集の工夫、構成の類似を勘案すると、確たる史料はないものの、『平安通志』の何らかの影響のもとに成ったと推測することも可能ではないだろうか。

以上のような性格をもつと考えられる『京都誌要』であるが、その構成について気になる点を一つあげておきたい。この書は前述のように京都市中を中心に山城国内各郡の地誌を述べたものであるが、なぜ丹波や丹後など京都府北域に関する記述を入れなかったのだろうか。維新の記憶がいまだ生々しかったであろう一八八二年刊の『小学山城地誌』が山城国内に限定し

た内容となったことは理解できるとしても、すでに市制・町村制が成り、地方行政の骨格も定まった時期に、公立学校の「教授用に編纂」されたはずの『京都誌要』が京都府という領域に視野を広げなかったことは納得ができない。今ただちに解明することはできないが、一八九〇年代における地域認識のありようを考える上で、軽視できない問題が潜んでいるように思われる。後考を期したい。

## 2 郷土教育をめぐる論議の進展と郡部における取り組み

一八九一年の「小学校教則大綱」にはじめて郷土の語が用いられ、教育の方向性が示されたのだが、さらに外池智の研究を参照すると、そののち一九〇〇年の小学校令改正において郷土に関する内容は規定から除かれてしまった。外池は、その背景として、〇三年の国定教科書制度の成立などに象徴される教育画一化の進行があったとみているが、首肯できる見解である。しかし、一方で一九世紀から二〇世紀への転換期のころから、教育学の研究者や教員の間から郷土教育を推進しようという声が上がるとなり、画一化を図る政府の思惑からは逸脱して、さかんに議論が交わされることになった。京都府においても、新たな教授用資料が作成されたり、京都府教育会（以下、府教育会）の機関誌上でも郷土教育の内容や方向性について意見発

表があるなど、それまでにない活況を呈するようになる。どのような実践や言説が生まれたのか、具体的にみてみよう。

一九〇一年三月一日に京都市高等小学校編纂『京都市郷土地理歴史』（村上書店 学歴博）が刊行された。内容は、前述したこれまでの書籍と同じく京都市内の山・川・地名・史蹟などの説明と末尾に年表を掲載したものである。凡例には「本書は京都市高等小学校の郷土地理歴史教授用に便せん為本市の各高等小学校協議して編纂したるものなり」と記されている。五年前の一八九六年には前述の『京都誌要』が刊行されているが、これを発展的に受け継いだのか、否定して新たな一書を編んだのか、両者の関係は不明とせざるを得ないが、『京都市郷土地理歴史』においては、「本市の各高等小学校協議して編纂したるもの」として、公的性格を明示している点が大きな相違点といえるだろう。奥付には「著作者」として、森村広太郎、岡本助左衛門、杉本仙太郎、川島元次郎の四人の姓名が掲出されており、執筆者についても明らかにされている。

右執筆者のうち川島元次郎については、前掲『歴史学の誕生』所収の福家崇洋の研究がある。福家論文によると、のちに京都帝国大学で日本史を学び府内自治体史の編纂などにも関与して重大な役割を果たす川島は、この時期、京都市第四高等小学校的訓導として教壇に立っていた。他の三人については詳細

は不明であるが、おそらく初等教育にかかわっていた人びとではないかと思われる。

右『京都市郷土地理歴史』刊行からほぼ半年後、一九〇一年九月二〇日付の府教育会機関誌『京都府教育雑誌』一一三号に京都府師範学校附属小学校「尋常小学郷土誌教授要項案 教授の方針及び教授上の注意」と題した論文が発表された。府教育会の機関誌に最初に発表された郷土教育にかかわる論考であり、その内容は次のようなものであった。まず最初に基本的な考えが示されている。

尋常小学校に於ける国語教授は言語文字の形式を本領とし、日常必須の智識を<sup>レ</sup>取得せしむることを副とするものなれば、教授上形式内容両面の目的を貫徹せんが為め、国語科に附随聯絡して特にこの一科を設く

一読して分かりにくい表現であるが、国語教育とは「言語文字」と「日常必須の智識」を学習するものであり、この両者の学びの「目的を貫徹」するために、「国語科に附随聯絡」して郷土教育を進めるといった趣旨であろう。「郷土誌教授要項」という表現が示すように、地誌をまとめた書籍をテキストとして読本として学んでいくといった形式が想定されていたように思わ

れる。したがって、教育課程のなかには次のように位置づけられた。

教授の時間は国語科教授時間中より第二二学年に在りては毎週一時、第三四学年に在りては毎週二時を割きて之に充つ

こうした師範学校附属小の「要項案」は、「郷土地理歴史」の学習として進めようとしてきた、従来の取り組みの方向とは大きく異なるものであった。師範学校附属小の名で権威づけられることによって、以後の議論を領導する役割を期待されて掲載されたのではないかと考えられるが、あまりの急転換に反対も強かったと思われる、批判的論考が以後の『京都府教育雑誌』に寄せられ論議が活気づくことになった。

一九〇二年四月三〇日付『京都府教育雑誌』一一〇号（京大図）に石倉久造「尋常小学校に於ける郷土の基本観念」が発表された。石倉は京都市内の小学校教員であったと思われるが、師範学校附属小案を次のように批判した。

本誌面に於て昨年来尋常小学校郷土史要項案なるものを見ながら、之を本府師範学校附属小学校にて編制せられたるも



ので、誠に詳細で結構なものである、併しこれを其儘吾々が実際に用ゆるといふことは出来ぬ、蓋し学校の事情の異なるによる事で、且つ未だ如何なる方法にてやらるゝ、か見もせぬ事ゆゑ何とも申し様がない

石倉は、「誠に詳細で結構なもの」と師範学校附属小案を慇懃に評価した上で、「学校の事情」が多様であるから「実際に用ゆるといふことは出来ぬ」と否定したのである。次いで国語科に位置づける案についても批判した。

郷土について観察して見れば、何れの所にも理科や地理の教材は吾人の周囲を取りまいて居る、其間にその城趾、こゝの古墳、あそこの記念碑などが、具体的に歴史を物語つてゐる、実に一部落の郷土は通俗百科全書といつてもよい、(中略)是等の材料によつて地理、歴史、理科は勿論其他の学科の基本観念を置く事が出来て、他日郷土以外の教材に接しても敢てビクともしないでドシドシ類化し得ることは明である。

石倉は、言葉を学ばせることに関連づけようとする師範学校附属小案に対して、あくまで「地理、歴史、理科」に基礎をお

いて郷土教育を進めようとしたといえるだろう。

同じく一九〇二年二月二十五日付『京都府教育会雑誌』一二八号には服部生「郷土科教授細目」が掲載されている。この論考も、郷土教育が「修身国語其他の学科に於て授けらるゝ事も多いが、漏脱する所も多いから、各校其教授細目を設定するに若くはない」として、各学校の独自性を強調した。さらに私案として第一学年から四学年までの指導案を発表しているが、これも地理や歴史、理科等の総合的な学びをめざそうとするものであった。

「郷土科教授細目」を発表した服部生は別の観点からも注目される。それは服部生が相楽郡加茂小学校の教員と名乗っていることである。これまで紹介してきた児童向けの地誌はすべて京都市中を対象としたもので、附随して山城国内各郡が描かれるだけであった。また、編集・執筆にかかわった教員も京都市中の者が中心であると考えられる。管見の限りであるが、ここまでの段階で郡部を対象とした児童向けの地誌はみられず、郷土教育に関心を向けた教員も見当たらない。服部生は郷土教育について郡部から声をあげた最初の教員である可能性があり、であるとすれば、京都市中にとどまっていた関心が府内各地に広まりはじめていたと推定できるだろう。実際、服部生の論考発表から二年後、一九〇四年に府教育会北桑田郡部会編によ

る『北桑田郡誌』（歴彩館）が刊行されるが、その「凡例」には「本誌ハ郡内小学校ニ於テ郷土誌教授ノ参考ニ資スルヲ以テ旨トス」と記されており、明らかに郷土教育を志向した内容となっていた。

一九〇二年は郷土教育をめぐる言説が交錯した年となったが、その七月に京都市尋常高等小学校校長会編纂『京都郷土誌』（三書房 学歴博）が刊行された。内容は、これまでと同様の京都市の地誌であったが、児童の目線に合わせた斬新な編集様式をとっていた。その冒頭は、「皆さんが住んで居る京都市中を皆さんと共に歩いて見る積り、御苑内から東北へ出掛ること、致しませう」とはじまる。児童とともに京都市内を歩き、地形や史蹟などを確かめるといふ趣向のテキストであった。こうした形式の地誌は後述するように三〇年代になるといくつかみられるようになるが、本書はその嚆矢をなすものであった。

京都市から府域全体への問題意識の拡大、そして児童の関心に沿ったテキストの作成。京都府の郷土教育の様相は一九〇〇年代を境に変化がみられるようになった。

## 二 一九一〇～二〇年代の地域史・誌の刊行状況と郷土教育

### 1 地域探究の深化

前掲『歴史学の誕生』所収の秋元せき「重永潜と栗野秀穂」は、二〇世紀初頭の京都における歴史学など人文諸科学の展開状況を理解するために興味深い論考である。秋元論文によると、重永潜は京都帝国大学文科大学で社会学を学んで都市計画を専攻し、一九一九年に「都市計画の基礎としての都市測量」と題した論文を発表し、京都市都市計画部調査課長などを歴任して都市行政の一角を担った。重永の主張の特徴は、「都市測量のなかに、「歴史的測量」を組み込んで考える点」にあったという。一九一五年の大正大典を契機に、京都では近代都市への変貌が進んでいたが、重永はこれに歴史的要素を加味した都市計画を構想したのである。

また、栗野秀穂は京都帝国大学文科大学で国史を学び、重永の課長時代に京都市嘱託として土木局に勤務し『京都市計画史』の執筆にたずさわったという。それより以前、一九一七年八月に栗野は京都帝大の同窓会とともに史学地理学同致会を設立し、史蹟調査などを開始していた。史学地理学同致会は二〇

年一月に『京阪文化史論』（星野書店 歴彩館）を刊行しているが、これは、一九年夏に同会主催によって開催された「文化史上より見たる京阪地方」と題した講演会の講演録であり、その「序言」には次のように記されていた。

従来史学の研究は主力を政治史的方面にのみ注がれ、国民生活の表現たる文化史の研究に甚だ疎なるの傾向あり。しかるに近時文運の隆昌は遂に史学を駆りて文化史研究を高唱せしむる風を生じ、其進歩漸やく見るべきものあり。

右にみるように、史学地理学同致会は「国民生活の表現たる文化史の研究」を進めようとしていたのであり、主催した講演会にも、そうした研究を志向する人びとが登壇した。具体的には、黒板勝美、三浦周行、内藤虎次郎などすでに学者として名を成していた人びとや、栗野と同世代の魚澄惣五郎、西田直二郎ら少壮の研究者である。このなかには郷土教育に関心を向ける人もおり、たとえば京都帝国大学教授の三浦周行は、少しのちのことになるが、前掲郷土教育連盟の機関誌『郷土』一号（一九三〇年一月）に「郷土研究の意義」と題した一文を寄稿し、「全一國史は各郷土史の集積なり、各郷土史にして闡明せられずんば、全一國史の完璧を望むも得べからず」と述べ、

中学校や高等女学校に「郷土室」を設けるよう求めていた。また、三浦の教えを受け、のちに京都帝国大学教授となり、文化史学を提唱したことで知られる西田直二郎<sup>(8)</sup>については、『歴史学の誕生』所収の入山洋子の研究があるが、入山論文によると、西田は一九二九年に「郷土史研究と其教育」（『地理研究号』自然科学特輯、四卷二号）を発表しており、「郷土を対象とした場合、それが研究者にとって、英雄偉人や中央政治史よりも、心情的・地理的に身近な存在であるがゆえに、鮮明に「人間性表現」を見ることができるとの立場から、郷土教育にも積極的な姿勢を示していたという。

次に述べるように、一九一〇～二〇年代の京都府では郡史誌や町村史誌・郷土誌などが数多く刊行され、これに小学校教員も関与していくことになる。こうした経験が三〇年代の郷土教育隆盛の前提になると考えているのだが、こうした動向に影響を与えた要因として、秋元論文や入山論文が指摘したように、急速に発展・変貌する都市を歴史的に考察しようとする姿勢や、「国民生活の表現たる文化史」を探究しようとする知的環境が、京都において育っていたことも考慮しておくべきだろうと思う。

## 2 郡史誌編纂と郷土教育

一九一〇年代以降における郡史誌、町村史誌・郷土誌などの刊行増大の背景には、日露戦争後の地方改良運動により町村の自治能力の強化がめざされたことや、一五年の大正大典の記念事業の一つとして史誌編纂が進められたことがある。二〇年代に入ると、郡制廃止が日程にのぼってきたこと、二二年が学制頒布五〇年にあたるのが刊行の理由となり、二〇年代末になると昭和大典記念としての刊行もあつた。いずれも帝国となつた日本国家への求心力を高めようとする統治の意志を反映したものである。しかし、一方的な統治の側からの働きかけだけでなく、これに対応しつつ地域のアイデンティティーを確立しようとしていた社会の動向も見逃すことはできない。

近年、二〇世紀前半期の地方行政が主体となつた史誌編纂をめぐって、政府・内務省の統制を受ける地方行政の担当者、大学に所属して学術的な史料批判・操作の訓練を経験してきた専門的な研究者、地域に根ざした研究を進めて郷土の誇りを紡ぎ出そうとするいわゆる郷土史家、といった多様な人びとの思惑が複雑に交錯してきたことを明らかにする研究が進んでいる。これまでもたびたび引用してきた『歴史学の誕生』に収められた諸論文がそうであるし、この他にも、『足利市史』編纂を事例として専門研究者と地域社会の相克を描いた廣木尚の研究<sup>(9)</sup>、

『名古屋市史』編纂過程における史料収集作業や、これにかかわって成立した名古屋史談会の動向に注目した木村慎平の研究<sup>(10)</sup>などがある。こうした先行研究に学びつつ、一九一〇～二〇年代の編纂・刊行された郡史誌、町村史誌などと初等・中等教育の教員とのかかわりについて探つてみたい。

まず郡史誌から確かめていくが、大正大典にかかわる京都府の史誌編纂状況については小林丈広の研究<sup>(11)</sup>があり、これを参照しつつ、発行年順にまとめたものが表1である。全体を概観するために一九〇〇年代のうちに刊行された2点と、大正大典を記念して編纂された『京都府誌』（歴彩館）も合わせて並べた。

表1 郡史誌一覧

| 発行年  | 書名         | 編者          |
|------|------------|-------------|
| 1904 | 北桑田郡誌      | 府教育会北桑田郡部会  |
| 1908 | 山城綴喜郡誌     | 府教育会綴喜郡部会   |
| 1914 | 丹後国中郡誌稿    | 中郡役所        |
| 1915 | 京都府誌       | 京都府         |
| 1915 | 加佐郡誌       | 府教育会加佐郡部会   |
| 1915 | 船井郡誌       | 船井郡教育会      |
| 1915 | 丹後国竹野郡誌    | 竹野郡役所       |
| 1915 | 京都府紀伊郡誌    | 紀伊郡役所       |
| 1915 | 京都府竹野郡誌    | 府教育会竹野郡部会   |
| 1919 | 何鹿郡史蹟天然紀念物 | 何鹿郡教育会      |
| 1920 | 京都府相楽郡誌    | 府教育会相楽郡部会   |
| 1922 | 久世郡史       | 久世郡役所       |
| 1922 | 京都府葛野郡史概要  | 府教育会葛野郡部会   |
| 1922 | 与謝郡誌       | 与謝郡小学校長会    |
| 1923 | 京都府与謝郡誌    | 与謝郡役所       |
| 1923 | 京都府宇治郡誌    | 宇治郡役所       |
| 1923 | 京都府北桑田郡誌   | 北桑田郡教育会     |
| 1923 | 京都府熊野郡誌    | 熊野郡役所       |
| 1924 | 葛野郡誌       | 葛野郡教育会地歴研究部 |
| 1924 | 南桑田郡誌      | 府教育会南桑田郡部会  |
| 1926 | 何鹿郡誌       | 府教育会何鹿郡部会   |
| 1929 | 愛宕郡誌       | 府教育会愛宕郡部会   |

前述のように刊行にいたる事情は多様であるが、三〇年代の郷土教育隆盛を前にした二〇年代までの状況を知るために一括してかかげた。

表1掲載の郡史誌は一六郡にわたる二一点であるが、編者別に分けてみると、郡教育会が一二点、郡役所が七点、郡小学校長会一点、郡教員会一点となる。各書の冒頭にかかげられた序文や凡例などにより編纂の経緯が判明するもののうち、初等・中等教育の教員がかかわったと考えられるものを取り上げて整理すると以下ようになる。

①郡教育会・郡小学校長会・郡教員会編纂の郡史誌

○一九〇四年・府教育会北桑田郡部会『北桑田郡誌』

具体的なことは不明であるが、前述したように「郡内小学校ニ於テ郷土誌教授ノ参考ニ資スル」ことを目的としており、教員がかかわっていたと考えられる。

○一九一五年・府教育会加佐郡部会『加佐郡誌』（歴史館）

「例言」に、「本誌は教育の資料に供せんがため本郡中部校長会の事業として調査に着手したりしものを、大正三年一月当研究部に於てこれが交付を受け、編纂完成せしめたるもの」とあり、教員の関与が判明する。

○一九一五年・船井郡教育会『船井郡誌』（歴史館）

編纂者の一人に川島元次郎がいる。前述のように福家

崇洋の研究があるが、福家論文によると、この時期、川島は『京都府誌』編纂の中心的役割を担っており、『船井郡誌』にあてる時間は少なかったと思われる。したがって、川島の名で記されている本書の「例言」には、「本書の編纂は船井郡教育会の計画に係り、予め資料記述の綱目を定めて各町村に配附し、町村に於ては町村立小学校長概ね之が記述の任に当り資料を同会に送附したり。斯くの如くして大正二年七月に全部資料の蒐集を完了したり」とある。つまり、あらかじめ定められた「資料記述の綱目」に沿って各小学校長が「記述の任」にあたったものを川島がまとめたのである。

○一九二二年・与謝郡小学校長会『与謝郡誌』（歴史館）

他の郡史誌は各郡役所の発行となっているが、この書のみ発行元を「京都宝文館」としている。この郡誌と郡役所の関係が知りたいが、今のところ不明とせざるを得ない。校長会名の「緒言」には、「本書は尋常小学校第一四学年後期用として編纂したものである」とことと、「本書は本郡の概要を知らしめると共に町村誌と相俟つて地理歴史に関する基礎的観念を養成せんとするものである」とことが述べられている。明らかに郷土教育を志向しており、教員の関与は明らかとみるべきだろう。

○一九二三年・北桑田郡教育会『北桑田郡誌』（歴彩館）

○四年に続く二回目の編纂であるが、「北桑田郡誌序」には前回刊行から「爾來年を閲すること二十、其参考として十分ならざる箇所」が生じたため、新たな郡誌編纂にいたったこと、「大正十年一月郡会の議決を経て専門学者二氏に其の編纂を囑」したことが記されている。「専門学者二氏」とは、地理学者の藤田元春と京都市立第一高等女学校教諭小酒井儀三であった。藤田による「緒言」には編纂の経緯が詳細に記されている。これによると、「西原郡長は郡誌編纂の材料として、既に前年から郡内の小学校の方々に資料を蒐集させると同時に、村誌を提出させてゐられたので、比較的豊富な材料凡三十点が送付せられた」という。さらに、「其後熱心な校長例へば神吉村で松田安之助君、弓削村で多富倉之助君、周山村で村山弥一郎君、山国村で長井登君、半田彦四郎君、森馬太郎君、平屋村で伊藤民蔵君、宮島村で大東伍一君、鶴ヶ岡村で林峯太郎君、宇津村で真継勝平君、校長以外で山国村の野尻岩次郎君、宇津村の岡本正巳君といったやうな人々の、熱心に蒐集記録された村誌処誌があつて、余程詳しい材料が揃つた次第」ということになった。しかしなお不十分であつたので、藤田・小

酒井の二人は郡内各村を「京都府史蹟調査委員魚澄文学士」、つまり魚澄惣五郎の助力を得て調査した。さらに、「維新以後現在の郡の状態産業統計の部分」については、「弓削村の井川市太郎君に囑托したところ、同君は絶倫の精力を以て熱心に執筆されることになり、ようやく完成にいたつた。以上が編纂の経緯の主要であるが、郡内小学校長が史資料の収集に大きな役割を果たしたことは明らかだろう。

○一九二四年・葛野郡教員会地歴研究部『葛野郡誌』（歴彩館）

編纂にあつた地歴研究部という組織の詳細は不明である。内容は、『大秦村誌』、大秦尋常高等小学校編『大秦村地誌』、『川岡村誌』、梅津尋常高等小学校訓導川崎常太郎著『梅津村誌』、『嵯峨町沿革』、『花園村誌』、神谷訓導著『梅畑村誌』、中川尋常高等小学校編『郷土誌』、松尾尋常高等小学校編『松尾村誌』の九点と、表紙・奥付等がないが、内容からみて小野郷村誌と思われる一冊、合わせて一〇点を合冊したものである。うち五点は編著者不詳であるが、記載内容の類似からみて、すべて地元小学校の編纂と考えてよいだろう。なお、『松尾村誌』のみが活版印刷で、ほかはすべて孔版印刷であ

る。『松尾村誌』は「松尾文庫第一篇」、「之れを第一篇として追々に発行する計画」と記されており、村史誌に關する計画的な出版活動が考えられていたと思われる。

○一九二六年・府教育会何鹿郡部会『何鹿郡誌』（歴史館）

「緒言」に「本部会は曩に学制頒布五十年記念事業の一として何鹿郡誌の編纂を企画」して、「郡内教育者中此の方面の造詣深き」者を編纂委員に指名して刊行したと記されている。「教育者」の所属学校などは不明であるが、教員関与の書としてよいだろう。

○一九二九年 府教育会愛宕郡部会編『愛宕郡誌』（歴史館）

この書は二〇年に刊行されており、二九年に「訂正再版」が出されている。二〇年刊行分は未見で、歴史館所蔵の二九年刊行書によったが、その「緒言」には、「本書は尋常小学校第四学年用として編纂した」ことと、「本書は本郡の概要を知らしめ、地理・国史教授の出发点となさんとするものである」ことが記されている。前掲の二二年『与謝郡誌』と類似の表現であり、何らかの連係がなされた可能性はあるが、詳細は不明である。

以上の八点である。郡の教育会や小学校長会、教員会といった組織が編纂にあたっている以上、当然教員がかかわっている

はずとの見方もあるだろう。しかし、一九二二年刊行の府教育会葛野郡部会編『京都府葛野郡史概要』（歴史館）が掲載する林茂郡長名の「発刊の辞」には、「京都府教育会葛野郡部会は爰に鑑みる所あり、本郡史の編纂を企図し此事業を挙げて大谷大学教授橋川正氏に委嘱したり」として、仏教史研究者の橋川に全面的に任せられたことが記されており、教育会などによる編纂がただちに教員の関与につながるとはいえない。

一方、郡役所の編纂によるものは、郡役所職員や専門研究者が担う場合が多いが、次のような例もみられる。

②郡役所編纂の郡史誌

○一九一四年 中郡役所編『丹後國中郡誌稿』（歴史館）

中郡長高辻巖による「附言」には、「中郡誌編纂事業の着手は明治三十六年にあり（中略）着手の当時より編纂者としては府立第二中学校長中山再次郎氏を煩はし托するに編纂の全部を以てす」とある。中山は、京丹後市立丹後古代の里資料館の調査<sup>12</sup>によると、帝国大学文学科（のち東京帝国大学文学部）で日本史を学び、一九〇〇年から府立二中の校長となっており、次の竹野郡誌にも登場するように地域史研究に尽力した。

○一九一五年 竹野郡役所編『丹後国竹野郡誌』（歴史館）

「序」の「附記」に「本誌編纂の資料蒐集に付ては

(中略)当初より之に関与し、史蹟の精査に実地の踏査に深更なる趣味を以て専ら之に従事し、全部の編纂を担任せられたる網野尋常高等小学校校長柴田勝治氏の労は多大なるものなり、又府立第二中学校長中山再次郎氏は編纂に対する方針及び体裁等につき懇切なる注意を与へられ、府立第四中学校教諭加藤鉄三郎氏は非常なる厚意を以て郡内古墳の調査に従事し、また良好なる材料を供し、尚有益なる稿を寄せられたり」と記されている。小学校長が「全部の編纂を担任」し、これに中山再次郎ら中学校に籍をもつ人びとが加わったのである。

○一九二二年 久世郡役所編『久世郡史』(歴史館)

「緒言」には、「本史は尋常小学校第五年以上に使用せしめんがため小学国史と聯絡して實際的教授に便せんとするもの」と記されており、郡役所編纂ながら郷土教育に供することを目的としていたことがわかる。

以上のように、郡史誌二一点のうち二一点の編纂に多くの教員がかかわっており、さらに五点は郷土教育に用いることを目的としていたことが判明した。教員は小学校だけでなく、府立二中の中山再次郎、四中の加藤鉄三郎といった専門知をもった中学校教員も参与していたことも注目すべきだろう。

### 3 村誌・郷土誌などの編纂と郷土教育

続いて町村史誌・郷土誌、及びその他の表題をもつ刊行物についてみていく。表1と同じように一九二〇年代までに刊行されたものを表2にまとめた。

一見して明らかのように、一九一五―一六年を中心に与謝郡内の小学校編纂による大正大典記念の村誌・郷土誌が多数刊行されている。すでにみたように二二年に「尋常小学校第四学年後期用」として『与謝郡誌』を刊行しており、その前提にこうした村誌・郷土誌があつたとみてよいだろう。大正大典期の町村誌編纂に関する小林丈広の研究があることは前述したが、この小林論文によると、与謝郡以外では紀伊郡で、竹田尋常小学校編『竹田村誌』、伏見町第二尋常小学校編『伏見町郷土資料』、堀内尋常小学校編『堀内村郷土誌』、横大路尋常小学校編『横大路村誌』、下鳥羽尋常小学校編『下鳥羽村郷土誌』の刊行があり、綴喜郡では小学校の沿革史が一〇点刊行されているという。これ以外の郡では編纂事業は確認できず、小林論文が指摘するように「郡単位で大きな精粗」があつた。同時期の奈良県では県教育会の企画により、大正大典記念として県内ほぼすべての市町村を対象に住民の衣食住、冠婚葬祭など生活文化を調べた<sup>(13)</sup>。その任にあつたのは県内各地の小学校教員で、あらかじめ定められた質問用紙を用いて勤務校のある市町村で調査



京都府における郷土教育の展開とその背景

表2 町村史誌・郷土誌一覧

| 発行年  | 書名           | 編著者                | 市郡名      |
|------|--------------|--------------------|----------|
| 1915 | 郷土誌          | 石川尋常高等小            | 与謝       |
| 1915 | 郷土誌          | 本庄尋常高等小            | 与謝       |
| 1915 | 御大典記念桑飼村教育資料 | 桑飼尋常高等小            | 与謝       |
| 1915 | 御大礼記念与謝村郷土誌  | 与謝尋常高等小            | 与謝       |
| 1915 | 三河内村郷土誌      | 三河内尋常小             | 与謝       |
| 1915 | 京都府与謝郡伊根村誌   | 伊根尋常高等小            | 与謝       |
| 1915 | 大典記念上宮津村誌    | 上宮津尋常高等小           | 与謝       |
| 1915 | 山田村郷土誌       | 不詳                 | 与謝       |
| 1915 | 与謝郡筒川村郷土誌    | 不詳                 | 与謝       |
| 1915 | 栗田村誌         | 市田富蔵               | 与謝       |
| 1915 | 宮津町城東村郷土誌    | 宮津尋常高等小            | 与謝       |
| 1915 | 御大典記念吉津村誌    | 吉津尋常高等小            | 与謝       |
| 1915 | 養老村郷土誌       | 日吉尋常高等小            | 与謝       |
| 1915 | 日置村郷土史資料     | 日置村農業補習学校          | 与謝       |
| 1915 | 日ヶ谷村郷土誌      | 日ヶ谷尋常小             | 与謝       |
| 1915 | 大典記念南桑教育     | 府教育会南桑田郡部会         | 南桑田      |
| 1916 | 朝妻村郷土誌       | 朝妻尋常高等小、大原・新井尋常小   | 与謝       |
| 1916 | 岩屋村郷土誌       | 岩屋尋常小              | 与謝       |
| 1916 | 郷土誌          | 野間尋常高等小            | 与謝       |
| 1916 | 京都府与謝郡岩滝村誌   | 弘道尋常高等小            | 与謝       |
| 1916 | 府中村郷土誌       | 阿蘇尋常高等小            | 与謝       |
| 1916 | 世木村誌         | 湯浅政次郎              | 船井       |
| 1918 | 郷土誌          | 市場尋常高等小            | 与謝       |
| 1922 | 三重郷土志        | 永浜宇平               | 中郡       |
| 1924 | 郷土読本         | 岡田下尋常高等小           | 加佐       |
| 1925 | 孝子塩見為藏翁      | 府教育会何鹿郡部会          | 何鹿       |
| 1927 | 天田加佐何鹿三郡人物誌  | 天田加佐何鹿三郡教育会        | 天田・加佐・何鹿 |
| 1927 | 京都読本         | 京都市教育会             | 京都市      |
| 1928 | 京都府相楽郡加茂町史   | 加茂町役場              | 相楽       |
| 1928 | 学区之歴史        | 室町教育会              | 京都市      |
| 1928 | 京を訪ねて        | 京都市教育会             | 京都市      |
| 1928 | 佐山村郷土誌       | 佐古尋常高等小            | 久世       |
| 1929 | 大原野郷土誌読本     | 石作尋常小学校地歴研究部       | 乙訓       |
| 1929 | 御大礼記念京都府伏見町誌 | 伏見町役場              | 紀伊       |
| 1929 | 児童中心弓削村誌     | 博習尋常高等小、真継統一       | 北桑田      |
| 不詳   | 世屋村郷土誌       | 世屋下尋常高等小、世屋上・木子尋常小 | 与謝       |

を実施した。こうした組織的・計画的な取り組みは京都府ではみられず、各郡・教育会の裁量に委ねられたと考えられる。

一九二〇年代に入ると、二八年一月に京都市で昭和大典が執行されたことが背景にあるのだろうが、京都市教育会の活動が活発になり、二七年に『京都読本』（歴史館）、二八年に『京を訪ねて』（歴史館）などが刊行されている。『京を訪ねて』は、その「はしがき」に「京都に遊ぶ人のために、これがよき案内者たれと生れたのが本書である」と記されているように、学校教育に主眼を置いたものではなく、名所旧蹟の観光案内本の体裁をなしていた。一方、小学校の動きとしては、加佐郡の岡田下小、久世郡の佐古小、乙訓郡の石作小、北桑田郡の伝習小などが村誌編纂を手がけている。これに前掲の二四年『葛野郡誌』に登場する小学校を合わせて考えると、徐々に府内各郡に郷土の状況を把握しようとする実践が広まっていたといえるだろう。

#### 4 郷土教育をめぐる議論

以上のように郡史誌・町村史誌・郷土誌などへの関与が増大するにつれて、府内の教員の間で郷土教育をめぐる議論も活発になっていった。府教育会の機関誌『京都教育』から確かめてみる。

一九一四年一月一〇日付『京都教育』二六九号に木戸完一「郷土科に関する研究（一）」が掲載されている。木戸は、従来の教育の欠陥は「主知主義に偏」して「注入教授」となり、「児童の活動力を無視」していることにあると述べ、郷土を学ぶことには、「児童をして郷土を対象とし、郷土の自然及びび人事を資料として直接に知識を取得し、心力を養ひ品性を陶冶せしむるものといふ意義」があるとする。そして、地理・理科の観点からの郷土教育は、従来のままで良いが、「歴史の趣味を養ふ方面については更に相当の方案を立つる必要を認むるものである。郷土に於ける伝説・歴史的遺物・偉人（郷土的に見たる）事業などを採つて以て情操陶冶に資すべきもの、調査研究はその第一要義とすべきものである」と主張した。

続いて木戸は翌一九一五年二月一〇日付『京都教育』二七二号に「郷土に関する研究（二）」を発表し、歴史学習について「単に教科書に記載してある史実をそのまま、に取扱ひ記憶を強ふるが如きは、国民教育に於ける歴史科の意義を滅却するものと批判し、近年は「郷土的材料の蒐集・調査が行はれる様になり、中にはこれを整理して一つの纏つた冊子とし教科書に準ずる取扱を試みるものさへあるに至つた（中略）か、る方面の調査・研究の盛んなることは喜ぶべき現象」であると評価した。

木戸の述懐は、一九一四―一五年の郡史誌・村誌の刊行を念頭においてのものであろう。しかし、学校での実践となると、木戸の期待ほどには進まなかったようである。一五年七月一日付『京都教育』二七七号に北溟「歴史科訓導研究会」が掲載された。これは同年六月に京都府師範学校主催で開かれた研究会の記録である。これによると、「教育の地方化の点より見て郷土知識を附与すること当面の要務なるに係はず、之が研究と取扱を逸視せるは一欠陥として指摘せざるべからず、吾人は研究会の結果に徴して益々痛切に此の不满を感じざるを得ざりき」とある。「郷土知識」を身につけることは重要であるにもかかわらず、「研究と取扱を逸視」する傾向があり、「不満を感じざるを」得ない、というのである。「逸視」は軽視するの意であるが、歴史の授業において郷土教育に関心を向ける教員は多くなかったと思われる。

これに反して地理の授業に関しては活発な論議が交わされた。一九一六年七月一〇日付『京都教育』二八九号に匿名の「地理研究会所見」が掲載されている。これによると、同年六月に開かれた研究会では、「地理の基礎觀念の養成方案并に郷土に関する意見は最も多数を占めてゐただけに討議もさかんであつた、誰れの意見も地理教授には基礎觀念は必要で、これを与へるのは郷土を直観せしむる事に依つて得させたいといふ点

は一致してゐる様であつたが、其の取扱の時期や方法は多少の意見があつた」という状況であつたという。郷土教育を重視する傾向が歴史学習に比べて相対的に強かつたようすがうかがえる。

京都府の郷土教育は以上のように進展し一九三〇年代を迎へることになった。

### 三 一九三〇年代以降の郷土教育の展開とその背景

#### 1 京都府女子師範学校の取り組み

これまでの研究の多くは、一九三〇年度予算で師範学校に郷土研究施設費が認められたこと、三一年一月公布の師範学校規定地理科に「地方研究」が導入されたことを郷土教育進展の画期とし、三〇年代の隆盛につながつたとみている。前掲伊藤純郎『郷土教育運動の研究』は、これを数年さかのほつて二四年四月に文部省の諮問機関として設置された文政審議会の議論に国政レベルでの転換をみているが、府県レベルではやはり三〇年から大きく変化したといつてよいだろう。京都府においても、三〇年七月三日付『日出新聞』が九月に開かれる小学校校長会で、知事から諮問があつた「小学校教育をして一層郷土に立脚せしむる具体的方案」を審議することになったと報じ、ま

た同年九月二七日同紙は郡部の中学校校長会が開かれ「郷土的教養」の育成についての方法が議論されたと伝えており、郡ごとと学校ごとに多様であった郷土教育の取り組みが三〇年を境に全府的な課題に変化していったようすがうかがえる。本ノートにおいても三〇年を区切りとし、これ以降の京都府における郷土教育の展開について以下に述べていく。

多くの府県で師範学校が郷土教育を指導する役割を担ったが、京都府においては女子師範学校がその中心となり、一九三三年に『郷土教育の概要』（歴史館）を刊行して方針を示し、三四年からは『郷土教育』（歴史館）と題した機関誌を刊行して研究論文や実践事例を発表していった。

『郷土教育の概要』の「第三、郷土調査の方針」をみると、「師範学校たる本校の使命に鑑み、地方小学校の研究を尊重すると共に、府下の郷土教育の総合的立場から之が中心となつて實際上の効果を期するところがなくてはならぬ」と記されており、女子師範学校が京都府郷土教育の指導を担うことを表明していた。さらに、「郷土研究に従事しつつある各小学校との聯絡を保ち、相携へて方向を誤らぬやう進み、又一地方が他地方との比較推究の必要ある場合は何時でも其の資料の提供をなし得ることも必要であり、自他共に相助けて府下の郷土教育を發展せしめんとするものである」として、府内小学校との連携や

資料提供などの援助を進めるとの意向も明らかにした。

女子師範学校は以上のような姿勢で郷土教育にのぞんだが、「府下の郷土教育を發展せしめん」と自認していた師範学校としてどのような教育理念をもっていただろうか。一九三三年刊『郷土教育の概要』の「序」を記したのは女子師範学校長上田剛であった。上田は、こののち三九年に離任するまで長期にわたって校長の職にあり、機関誌『郷土教育』二号〜六号の「序」や「はしがき」も執筆している。この三〇年代の女子師範を率いた学校長上田の言説をもとに確認しておく。

『郷土教育の概要』の「序」に上田は「忠臣は孝子の門より出づる様に、愛国の至情は郷土を離れて養はれない。何のかと云つても私は之が眼目だと思ふ」と記している。一九二〇年代まではみることがなかった郷土と愛国を直結する主張が、三年の上田の言説のなかにあらわれていた。さらに三五年刊『郷土教育』二号「はしがき」には「郷土を体験するに非ざれば、郷土人なく、郷土人なくんば、国民なしとする考方が主眼である。郷土教育が、若し、人を郷土に踞踏せしむるものならば、三文の値打なきのみならず、実に国家の賊である」と述べて国家主義的傾向を強めた。日中戦争勃発後の三八年刊『郷土教育』五号「序」になると、「人は郷土と共に栄え、郷土と共に存し、そこに始めて生命の躍動を見る。日本精神はとりも直

さず、此の郷土精神の洗練され、帰一されたものに外ならぬ。然らば即ち、現下非常時に於ける国民的覚醒なるものも、先づ近く、郷土に自覚するを要するは論を俟たぬ所である」といってそう激しい。

このような校長のもとで進められる師範学校の郷土教育は非科学的な皇国史観に偏していたのではないかと思われるが、必ずしもそうではなかった。「郷土教育の概要」をみると、地域の実態把握を重視しており、「教師のみの調査になる郷土研究は生徒の興味を刺戟することは極めて乏しい。殊に本校生徒は将来実地に自ら郷土調査に従事し、郷土教育の衝に当らねばならぬ任務を有する者である点から見ても、本校の郷土調査は寧ろ教師の指導による生徒の活動を主眼とし、之が整理に当たつても常に教師と生徒とが共同作業として行ふ」と述べ、生徒が主体となった調査活動を奨励し、資料を整理・保管するための「郷土研究室」を設けた。

女子師範学校における郷土教育の内容について、具体的に証する適切な史料は見当たらないが、機関誌『郷土教育』には毎号生徒の研究成果が掲載されている。今、実見できる二号（一九三五年刊）から八号（四一年刊）までの七冊で一二四点のレポートを読むことができる。これらから当時の生徒の関心の在処が判明するとともに、教育の主眼がどこに置かれていたかを

推測できると考え、内容別に整理したものが表3である。地域の町並みや戸口、山・川の利用などにかかわるものを「地理」、衣食住・冠婚葬祭などにかかわるものを「民俗」、地域の名産品など地場産業にかかわるものを「名産」、歴史的な事件や人物にかかわるものを「歴史」、植物や地質などにかかわるものを「自然」、社寺にかかわるものを「社寺」、地域を題材とした古典文学作品にかかわるものを「文学」として分けた。

表3にみるように「地理」分野が最多である。「名産」も経済地理学の範疇ととらえると、大きく人文地理に分類できるものが半数近くを占めている。

「歴史」や「文学」のなかには皇国史観の影響が強いものも散見されるが、それ以外は、データを集めて分析しており、かなり客観的な「郷土調査」が行われているように思われる。上田校長が「現下非常時に於ける国民的覚醒」などと主張した『郷土教育』五号をみると、掲載された二一本のうち「山間郷土に輝く

表3 『郷土教育』掲載の生徒レポートの内容別本数

| 号・刊行年   | 地理 | 民俗 | 名産 | 歴史 | 自然 | 社寺 | 文学 | 合計  |
|---------|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 2号・1935 | 1  | 4  | 8  | 2  | 5  | 1  | 1  | 22  |
| 3号・1936 | 0  | 8  | 6  | 1  | 4  | 5  | 2  | 26  |
| 4号・1937 | 3  | 4  | 5  | 5  | 0  | 2  | 0  | 19  |
| 5号・1938 | 6  | 2  | 3  | 5  | 5  | 0  | 0  | 21  |
| 6号・1939 | 9  | 4  | 0  | 3  | 1  | 0  | 0  | 17  |
| 7号・1940 | 4  | 3  | 1  | 3  | 1  | 0  | 0  | 12  |
| 8号・1941 | 7  | 0  | 0  | 0  | 0  | 0  | 0  | 7   |
| 合計      | 30 | 25 | 23 | 19 | 16 | 8  | 3  | 124 |

婦女子の貞節 細川忠興夫人事址」は校長に歓迎されそうなる内容であったが、これを除くと、「江戸初期の京染織界」、「普茶料理の研究」、「桃山東山間に於ける帰化植物」など実証的な作品が並び、「労働者統計より見たる京都市の人口吸引圏の一考察と工場労働状態」と題したレポートのように社会問題に踏み込もうとしたものもあった。

一九三〇年代の郷土教育は、国家的状況からいえば、総力戦体制構築に向けた国民総動員の一环として進められたといえようが、現場に降り立つと、そうした大きな物語には回収し得ない、かなり複雑な様相を呈していたのではないだろうか。そうした観点も忘れずに、次項では、この時期の小学校教員による史誌編纂事業を確かめてみる。

## 2 小学校における郷土教育の展開

一九三〇年以降、政府の施策として郷土教育が進められ、各府県の師範学校が指導に乗り出すことにより、小学校編纂による村誌や郷土誌が多数刊行されていく。京都府においても同様であり、表4には、管見の限りであるが、三〇年以降に刊行された、小学校と教育会による郷土教育にかかわる編纂物を刊行年次順に配列してみた。<sup>(14)</sup>年次別にみると、三三年刊行が七点、三二年が六点、三六年が五点、他はすべて三点以下となり、三

二、三三年が刊行のピークとなっていたことがわかる。

表4右列に小学校と教育会の所在する市・郡を示したが、地域別にわけると、どのような特徴がみえてくるだろうか。表4の三六点のうち府教育会による三二年刊『京都府郷土読本』を別にすると次のような結果となる。

○旧山城国域 一四 京都市 八、相楽郡 二、愛宕郡 一、

紀伊郡 一、久世郡 一、葛野郡 一

一、乙訓・宇治・綴喜郡 〇

○旧丹後国域 一四 与謝郡 五、加佐郡 四、竹野郡 三、

熊野郡 一、中郡 一

○旧丹波国域 七 船井郡 二、何鹿郡 二、北桑田郡 一

一、南桑田郡 一、天田郡 一

旧山城国域は一四点となっているが、このうち過半数の八点が京都市である。この多さは明治期以来の蓄積もあって当然の結果といえるだろう。一方、郡部は六点、乙訓・宇治・綴喜郡のように刊行がみられない郡もあり、総じて低調である。

旧丹後国域はすべての郡で刊行物があり、与謝・加佐両郡の多さが目立つ。表2で刊行点数が多いことを確認した与謝郡は、一九三三年と三六年に郡小学校長会が郡誌と教員用指導書を刊行し、表2にあらわれなかった二小学校が新たに刊行するなど郡をあげての取り組みが進んでいたと思われる。旧丹波国

京都府における郷土教育の展開とその背景

表 4 小学校・教育会編纂郷土誌等一覧

| 刊行年  | 書名           | 編著者                       | 市郡名 |
|------|--------------|---------------------------|-----|
| 1930 | 郷土読本         | 安詳尋常高等小、篠村實業補習学校、篠村立青年訓練所 | 南桑田 |
| 1930 | 郷土読本         | 山家尋常高等小                   | 何鹿  |
| 1930 | 児童文集 郷土読本号   | 伏見第一尋常小                   | 紀伊  |
| 1931 | 郷土調査         | 中舞鶴尋常小                    | 加佐  |
| 1931 | 本校郷土教育の実際    | 明俊尋常高等小、今西誠一              | 船井  |
| 1931 | 郷土読本         | 綾部尋常高等小                   | 何鹿  |
| 1932 | 我が郷土         | 明倫尋常高等小                   | 加佐  |
| 1932 | 郷土読本         | 網野尋常高等小                   | 竹野  |
| 1932 | 恭仁京誌         | 恭仁尋常高等小                   | 相楽  |
| 1932 | 我等の郷土        | 京都市小学校教育会研究部              | 京都市 |
| 1932 | 我が郷土         | 池内尋常高等小                   | 加佐  |
| 1932 | 京都府郷土読本      | 府教育会                      |     |
| 1933 | 郷土教育資料       | 宮津尋常高等小                   | 与謝  |
| 1933 | 久美郷土読本       | 久美尋常高等小                   | 熊野  |
| 1933 | 我が郷土         | 網野尋常高等小                   | 竹野  |
| 1933 | 与謝郡誌         | 与謝郡小学校長会                  | 与謝  |
| 1933 | 栗田村誌         | 栗田尋常高等小学校                 | 与謝  |
| 1933 | 郷土読本         | 養老尋常高等小                   | 与謝  |
| 1933 | 国史教材と郷土の史蹟   | 明倫尋常小、蘆田松太郎               | 京都市 |
| 1934 | 郷土物語         | 庵我尋常高等小                   | 天田  |
| 1934 | 郷土山国読本       | 協一尋常高等小                   | 北桑田 |
| 1934 | 修身教育資料郷土人物   | 京都市小学校修身研究会               | 京都市 |
| 1936 | 郷土読本         | 中舞鶴尋常小                    | 加佐  |
| 1936 | 京極学校史と郷土史    | 京極尋常小                     | 京都市 |
| 1936 | 郷土誌          | 五箇尋常高等小                   | 中   |
| 1936 | 与謝郡誌教師用書     | 与謝郡小学校長会                  | 与謝  |
| 1936 | 相楽郡誌         | 府教育会相楽郡部会                 | 相楽  |
| 1937 | 郷土読本         | 濱詰尋常高等小                   | 竹野  |
| 1938 | 京都を中心とする校外教育 | 京都市小学校教員会                 | 京都市 |
| 1938 | 松尾乃郷         | 松尾尋常高等小、浅井厩造              | 葛野  |
| 1939 | 明倫誌          | 明倫尋常小                     | 京都市 |
| 1940 | 郷土讀本         | 園部第一尋常高等小                 | 船井  |
| 1940 | 開智           | 開智尋常小                     | 京都市 |
| 1940 | 嵯峨讀本         | 嵯峨尋常高等小                   | 京都市 |
| 1941 | 郷土読本淀        | 明親尋常高等小                   | 久世  |
| 不詳   | 郷土の研究        | 修学院尋常高等小                  | 愛宕  |

域は総点数は多くないが、刊行がみられない郡はなく、全域に行き渡っているようすがうかがえる。

こうした地域的な差異が生じた理由については、学校教育だけにとどまらない、地域の地理や歴史に関する社会的な関心の違いがあるように思われるが、これについては次項で考えることとし、ここではさらに村誌や郷土誌の記述内容について検討する。

一九三二年刊京都市小学校教員会研究部編『我等の郷土』（歴彩館）の「緒言」には「我等は科学的な研究に於ては常に学者に追従すべく運命づけられて居る。私共は決してそれを不足には思つて居ない。私共は其の学説の中から是と信じたものをも具体化し實際化し、而して之を京都の小国民に教育することに於ては、独自の壇場を持つて居て、敢て学者に一步も譲らない覚悟と、自信とを有して居る」と記されている。実際は、研究者と教員をこのように単純に分離できるものではなく、両者の領域は相互に重なり合い、影響し合っているのだが、研究の成果を教室において「具体化し實際化」することが、教員の主な役割として期待されていることは確かであろう。

では、一九三〇年代の小学校編纂による村誌や郷土誌などは、「具体化し實際化」することによどの程度成功していただろうか。こうした観点から見ると、多くは地理的データの羅列で

あったり、名所・旧蹟を生硬な文体で説明している場合が多く、なかには郡史誌の引き写しではないかと覚しきものも散見される。教員用の参考書としてはともかく、児童用のテキストとしてはふさわしくない。しかし、こうした問題を克服しようとする試みがあらわれてきたのも三〇年代の特徴であった。すでに〇二年に児童の関心に沿った叙述形式をもつ『京都 郷土誌』が刊行されていたことは述べたが、その系譜を引く図書が刊行されていったことにも注目しておきたい。

たとえば網野尋常高等小学校『郷土読本』（一九三二年 歴彩館）は丹後縮緬の生産・流通を次のように記している（／は改行部 以下同じ）。

#### 第八 糸店

本町通から水江通にかけて大きな家構をした古風な店に数名の店員が山のやうに積んだ生糸や縮緬を数へてゐる様が街を行く人の目をひく。／これが古くから里人の間に糸店と呼ばれてゐる豪勢な店である。／丹後縮緬の本場である網野町では、この店が商業中の王座で現在は其の数実に十数軒に達してゐる。／百戸余の機屋に約千三百の優良機台を据付け、凡そ千五百人の従業員が復興の熱と力を以て毎日かちかち織つてゐる。町の縮緬は殆んど是等の糸店を



経て売捌かれるのである。(中略)糸店から積込んだ縮緬は殆んど全部京都にある白生地問屋へ行く。白生地問屋は染漬商に移す。染漬商は着物地や羽織地等の染付加工を施し是を各所の呉服店やデパートに売込む。それから一般消費者の手に渡るといふ販売経路を辿る。

建ちならぶ「糸店」の景観、その生産のようす、京都と結ばれた流通の状況。網野という郷土にとどまらず、世界につながる経路が描かれているといえるだろう。

次は協一尋常高等小学校『郷土山国読本』(一九三四年 京都府)

#### 一五 部落廻り

秋晴れの空は心ゆくまで晴れ渡つて一点の雲もない。僕等同級のものには村廻りをしようとかを出た。(中略)鳥居部落へ入るとすぐ井崎谷の切り通しが見える。此の道は弓削村へ出るのである。元は肝心な道路だったそうだが、今では間谷を越える道が通じてこの道はあまり人通りがない。下部落の家が一行に並んでゐるのに引きかへて此所はあちこちに点在してゐるので、従つて細い道が縦横に通じてゐる。本街道を出ると道の左に小川が流れてゐる。六箇

の堰より引かれた水で、山国盆地の重要な水道となつてゐる。(中略)山国神社に参拝して暫時休憩する。(中略)昔山国神社の前に大堰川が流れてゐたそうだが、度々の洪水で神社の境内が荒されるので嘉永三年藤野五郎右衛門、辻彦六両氏が相謀り遂に神社の裏に水路を開修して其の難を除く事が出来たそうである。

この記述も児童の目線に立ち、集落を巡り歩くという設定のなかで、児童が見慣れている道や川にも地域の歴史が刻まれていることを理解させようとするものとなつていた。

このような叙述スタイルの出現は、敗戦を境とした郷土教育の連続と断絶を考える上で重要であるように思われる。私事にわたるが、一九六〇年代に奈良市の小学生であつた筆者は『わたしたちの奈良市』という副読本を社会科の授業で学んだ記憶があり、そこではやはり網野小や協一小のような筆致が用いられていた。郷土教育は戦後の社会科の郷土学習にどのようながつていくのだろうか。この点については終章でもう一度考えることにする。

### 3 地域史研究の進展と郷土教育

旧山城国域にくらべて、旧丹後・丹波国域で比較的多くの小学校編纂による村誌や郷土誌が刊行されたのはなぜだろうか。

その背景には、これらの地域で歴史や民俗に関する研究を進める人びとの組織や人脈が豊かにあったことが指摘できるのではないかと思われる。

以下の記述は、京都府立丹後郷土資料館編特別陳列図録一四『丹後郷土資料と永浜宇平』（一九八四年 歴彩館）に学ぶところが多かったが、一九四一年二月二三日、与謝郡宮津町で丹波・丹後地方の郷土史家、歴史愛好家らが集まり多爾波郷土史壇会が発足した。アカデミズムの組織は別として、地域の人びとによる歴史研究団体は敗戦後には多数生まれるが、昭和戦前期までの京都府においては、これが唯一であったと思われる。丹後の歴史や美術の研究を進めてきた木下微風、沢村秀夫らによって『郷土と美術』が三九年四月に創刊されていたが、同誌二二号（一九四一年 歴彩館）に多爾波郷土史壇会の「会則」と「発会趣意」が掲載されている。「会則」の「目的」には、「両丹地方の歴史、考古、土俗、文学、美術、史蹟、名勝、天然記念物等郷土に関する一切の事項を協力研究」とあり、「両丹」つまり丹波・丹後地域の歴史、考古学、民俗等の研究を目的としていた。さらに「発会趣意」には次のように記されていた。

来る四月一日から実施される国民学校は郷土地理が中心と

なつて、施設経営されると聞いてゐる。更に中等以上の学校では亦国史が重要視されて「脚下照顧」の考が横溢し、日本我の發揮に一層の拍車を加へてゐる。今や上下拏つて郷土を見よ、郷土に帰れと叫ばるゝに至つた。また他面ではわが国民は戦線統後の区別なく東亜新秩序の建設と日本我の發揚とに邁進してゐる。この邁進の真最中に発足を見たのがこの「多爾波郷土史壇会」である。さうであるからその使命とする所は自明の理で、この会に依つて研究された郷土資料が、国民学校教育に参考ともなれば望外の幸であり、皇国精神振興の一助ともなればこよなき幸福である。

「郷土資料が、国民学校教育に参考ともなれば」と述べられており、郷土教育を念頭においた発会であつたことは明らかだろう。地域の歴史・民俗研究と教育を結びつけようとしていたのである。

多爾波郷土史壇会のような広域をカバーする団体が短時日で生まれただけではなく、それ以前に丹波・丹後地域の研究・文化活動の蓄積があつた。詳細は他日を期したいが、丹後においては、明治期に久美浜郵便局長の織田幾二郎による古物蒐集と、その展示施設織田考古館の開館があり、宮津藩家老の家に生ま

れた関清謙による丹後国歴史研究会の創立と機関誌『丹後考』の発行などがあつた。一九二二年には中郡三重村出身の永浜宇平が『三重郷土誌』を刊行、以後永浜は『丹後史料叢書』第一輯～五輯（一九二七年）、『丹後地震誌』、『天橋立』などの編著を精力的にこなしていった。

丹波においては亀岡で井上善吉により丹波青年社が創立され、一九二二年一月から『丹波青年』を刊行して地域の文化振興に力を尽くした。丹波青年社は三年に丹波の歴史や人物伝をまとめた『丹波及丹波人』（歴史館）を刊行するが、その序文によると、「南桑田郡は上村数馬、並河平太郎両氏に、北桑田郡は井川市太郎氏に、船井郡は小林源之助氏に、天田郡は公平喜代史氏に何鹿郡は四方源太郎氏」に記述を依頼し、全体の編集を井川市太郎が担ったという。書き手が各郡にそろつていたようすがうかがえる。福知山中学校教員、福知山淑徳高等家政女学校長などを歴任する山口加米之助は『天田郡記録』（笹田榮壽堂、一八九六年）、『福知山城史』（有朋館、一九三三年）、『天田郡志資料』（淑徳同窓会、一九三六年）などを著し、天田郡域の研究を蓄積していた。山口が教員であつた福知山中学校では、保護者会などの寄付により三八年三月に郷土館が設けられ、さらに四二年一〇月には福知山の歴史、地誌、人物を論じた『岳南読本』（歴史館）を刊行した<sup>(16)</sup>。その「序」には、

「本校には、先に保護者会の厚意により郷土室を設け、多数の資料を蒐集して生徒の郷土理解に努めて来たが、今爰に其の内の中心となるものを選んで岳南読本を編むこととした」と記されており、郷土館（室）による地域史料の収集・研究と教育を一体化して進めようと思われれる。

以上、一端を述べたにすぎないが、丹波・丹波においては多彩な人材によつて史誌の編纂事業が進められており、これが多爾波郷土史壇会の結成につながつたといえるだろう<sup>(17)</sup>。こうした研究の進展の上に、さらに表1にかかわつてみたように地域の教員が郡史誌などに関与することで郷土教育が活性化したといえるのではないだろうか。

おわりに

冒頭で本ノートの課題は、第一に京都府における郷土教育の展開過程を解明すること、第二に地域史研究の生成・発展との関連を探究することであると述べた。第一についてはラフなスケッチではあるが、基礎的事実について整理し、明治期に京都域に始まつた郷土教育の取り組みがしだいに府内に広がつた状況を明らかにした。第二については、文化史学という知的環境の成長があつたことや専門知を有する中等学校教員の参与、

丹波・但馬地域での研究の進展などと郷土教育の関連について指摘した。人的社会的関係の詳細については踏み込めていないが、これらについてはそれぞれに専論が必要であり、小論はそれに向けた中間報告と位置づけ研究ノートとして提示した。

なお、最後に留意しておきたいことは、前述の第二次大戦後の教育との連続と断絶という問題である。一九三八年九月、京都市小学校教員会研究部編『京都を中心とせる校外教育』（学歴博）が刊行された。これは「実際の校外指導に即刻役立つもの」として編纂されており、遠足などの学校行事に用いられることを想定し、「特に教科書と郷土資料との関係を具体的に明かにすることに努めた」と述べている。

敗戦の後、一九五二年一月、京都市社会科教育研究会編集による『京都市を中心とした校外学習』（学歴博）が刊行された。その「はしがき」には、「本書は、先に刊行された本市小学校教員会編『京都を中心とせる校外教育』の精神をうけつぎ、その後に展開した教育思潮に照し、又、今日の新時代に即応することを考慮して再編成したものといい得る。教育観の変化に伴い根本的に改編された部分も多いが、比較的变化の少ない客観的な事実等に関する部分は、そのまま受入れているのである。大体において本書の編集の根本方針は、前書を踏襲している」といい得るのである」と記されている。「その後

に展開した教育思潮」や「今日の新時代に即応」とは日本国憲法にもとづく教育基本法に即して改めたという意味であろうが、それでも三八年の刊本の「精神をうけつぎ」、「編集の根本方針は、前書を踏襲」したのである。五二年の社会科教員たちは昭和戦前期までの郷土教育をどのように総括し、何を継承しようとしたのだろうか。

こうした点については近年の須永哲思の研究<sup>(18)</sup>があり、『京都市を中心とした校外学習』も事例としつつ、郷土教育の連続性に注目した議論を展開している。こうした成果に学びつつ、京都府の戦後にまで視野を広げた上で、地域の特性を踏まえた郷土教育史を確立することが本ノートに課せられたもう一つの重要な課題となるだろう。

#### 〔付記〕

本ノート作成にあたっては史料所蔵各機関からご協力を得た。とくに京都市学校歴史博物館学芸員林潤平氏から多くのご教示をいただいた。本ノートは二〇一七年一月一九日に実施された京都歴史研究会の例会で報告した内容をもとに、当日いただいたご意見・ご批判を参考に作成した。皆さまに感謝申しあげる。

#### 注

(1) 同志社大学人文科学研究所ホームページ「研究会のテーマ

- と概要」(<https://jinbun.doshisha.ac.jp/theme/20th.html> 二〇二一年八月四日閲覧)
- (2) 羽賀祥二『史蹟論 一九世紀日本の地域社会と歴史意識』(名古屋大学出版会、一九九八年)
- (3) 若尾祐司・羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史 史誌・記念碑・郷土』(名古屋大学出版会、二〇〇五年)、羽賀祥二編『近代日本の歴史意識』(吉川弘文館、二〇一八年) など。
- (4) 『郷土』研究会編『郷土 表象と実践』(嵯峨野書院、二〇〇三年)、由谷裕哉・時枝務編著『郷土史と近代日本』(角川学芸出版、二〇一〇年) など。
- (5) 郷土教育連盟の機関誌『郷土』、『郷土科学』、『郷土教育』をみると、中部・関東地方などの諸県の実践はよく取り上げられているが、京都府や、これに隣接する大阪府、奈良県は見当たらず、他にも関与しなかった県は多い。こうした地域的偏差があることは、一九三〇年代の郷土教育を考える場合、軽視できない事実であると思うが、そうした背景を明らかにするだけの材料を持ち合わせず、今後の課題としたい。
- (6) 小林丈広『平安通志』編纂と歴史学―湯本文彦・阿形精一らの模索―(本文にも記した小林編著『京都における歴史学の誕生―日本史研究の創造者たち』ミネルヴァ書房、二〇一四年、所収)
- (7) 福家崇洋「海外雄飛時代の歴史学―川島元次郎と京都の歴史―」(注(6)前掲小林編著『京都における歴史学の誕生―日本史研究の創造者たち』所収)
- (8) 入山洋子『京都市史』編纂と歴史学―西田直二郎の挑戦―(前同『京都における歴史学の誕生―日本史研究の創造者たち』所収)
- (9) 廣木尚「近代日本の自治体史編纂におけるアカデミズム史学と地域意識―『足利市史』編纂をめぐる―」(『日本史研究』五七九号、二〇一〇年)
- (10) 木村慎平「一九一〇年代の自治体史編纂と『史料』―『名古屋市史』編纂事業を事例として―」注(3)前掲羽賀祥二編『近代日本の歴史意識』所収)
- (11) 小林丈広「大正大典期の地域社会と町村誌編纂事業」(『京都市歴史資料館紀要』一〇号、一九九二年)
- (12) 丹後古代の里資料館が二〇〇八年に開催した展示「郷土史の黎明―明治時代の丹後地域―」の解説資料による。
- (13) その調査結果が刊行されることはなかったが、『奈良県風俗誌』としてまとめられ奈良県立図書館に所蔵されている。
- (14) 地域全体を把握しようとした村誌や郷土誌などに限り、学校沿革史は除いた。
- (15) 京都府庁文書「郷土館竣工ニ関スル件」(歴彩館所蔵「雑昭和十三年」(昭一三一九―一二)〇。芦田完「郷土館(室)の沿革と現状」(創立七十周年記念誌編纂委員会編『福知山高校七十周年記念誌』一九七三年)による。
- (16) この他、府立第三中学校が一九三〇年に歴史館を設置(府立第三中学校編『昭和御大典記念歴史館要覧』一九三二年)し、府立第二中学校が三十七年に教諭井上頼壽執筆による『京二中附近の史蹟名勝』を刊行するなど中等教育機関の活動に

もみるべきものがあるが、本ノートでは力が及ばず他日を期したい。

(17) 丹波・丹後地方における地域史研究は第二次大戦後も精力的に続けられ、今も阿丹地方史研究者協議会編『阿丹地方史』、福知山史談会会報『史談福智山』、舞鶴地方史研究会編『舞鶴地方史』などが継続して発行されている。

(18) 須永哲思『桑原正雄の郷土教育（資本の環）の中の私達』（京都大学学術出版会、二〇二〇年）